

# Álvaro del Portillo

アルバロ・デル・ポルティエーリョ

- ◆ 福者ヨハネ・パウロ二世教皇への愛
- ◆ ドン・アルバロの取次ぎによる恵みの報告
- ◆ 『道』に登場しているドン・アルバロ
- ◆ モンコーレ病院（コンゴ民主共和国）の成長

3 はじめに

4 福者ヨハネ・パウロ二世教皇への愛

8 ドン・アルバロの取次ぎによる恵みの報告

9 『道』に“登場”しているドン・アルバロ

10 モンコーレ病院(コンゴ民主共和国)の成長



来日した際のドン・アルバロ  
(上:1987年2月22日芦屋市、下:2月15日長崎市)

アルバロ・デル・ポルティエーリョ司教は、1914年3月11日、マドリード(スペイン)のカトリック信者の家庭に8人兄弟の3番目の子として生まれた。師は土木工学博士であり、哲学と教会法の博士でもあった。

1935年、聖ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲル師が1928年10月2日に創立したオプス・デイに加わり、以後専門職と日常の務めを聖化しつつ、オプス・デイへの召し出しを十全に生きた。学業や専門職の場で同僚との幅広い使徒職を繰り広げた師は、早くから聖ホセマリアの右腕となり、およそ40年間、腹心の協力者として、その傍らで働いた。

1944年6月25日、司祭に叙階され、以後、司牧活動のみに従事し、オプス・デイのメンバーとすべての人々に仕えた。1946年、聖ホセマリアと共にローマに居を定める。聖座の種々の省の顧問に任命されて勤勉にその職責を果たしたほか、特に第二バチカン公会議の仕事に積極的に参加するなど、倦むことなく教会に仕えた。

1975年9月15日、聖ホセマリアの最初の後継者となる。1982年11月28日、オプス・デイが属人区

(プレラトゥーラ・ベルソナーリス)として設置されたことに伴い、福者ヨハネ・パウロ二世教皇よりオプス・デイの属人区長(プレラトゥス)に任命され、1991年1月6日、司教に叙階された。アルバロ・デル・ポルティエーリョ司教の統治において際立つことは、創立者とその教えに対する全面的な忠実と、教会に仕えたいという熱意から属人区の使徒職を推進させるに当たって示した疲れを知らぬ司牧活動への努力である。自らの使命を聖ホセマリアの教えに従って献身的に遂行したが、その基盤となったのは、聖霊の働きの結果である。神との父子関係の深い認識であり、祈りと聖体と聖母へのこまやかな信心に育まれ、父なる神の御旨にすべてを委ねてキリストとの一致を求めることである。教皇と司教方とは緊密な一致を保って教会への愛を表した。その愛徳、霊的子どもたちへの倦むことのない心遣い、謙遜、賢慮と剛毅、喜びと率直さ、自己放棄、その司教紋章に「キリストが支配されるように」(Regnare Christum volumus)とされるように人々をキリストのもとへと導くために示した燃えるような熱意は、善良で明るく温かな人柄と相まって司教の人格の特徴であった。

ナザレから聖墳墓へと、イエスの生涯を信心深くたどった聖地巡礼から戻って数時間後、1994年3月23日早朝、主はこの善良で忠実なしもべをみもとに召された。その前日、エルサレムの最後の晩餐の高間教会でたてたミサ聖祭が生涯最後の聖体祭儀となった。

福者ヨハネ・パウロ二世教皇は、3月23日当日、属人区教会である平和の聖マリア教会に安置された師の遺体の前で祈られた。師は今、オプス・デイに属する信者や多くの人々の祈りと愛情に包まれて同教会の地下墳墓に眠る。



## はじめに

*Omnes cum Petro ad Iesum per Mariam!* 皆がペトロと共にマリアを通してイエスへ!

ドン・アルバロは数え切れないくらい頻繁にこの射祷を繰り返しました。聖ホセマリアが時々この射祷を用いて、オプス・デイが目指しているものを要約していたからです。つまり、聖母マリアの力強い執り成しを得、教会の目に見える頭である教皇と一致して、共に人々をイエス・キリストのもとへと導くことであると。

「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエス、ただお一人です」(1テモテ2,5)というように、救いはすべてキリストのからだである教会を通して実現します。この教会においてローマ教皇は地上におけるキリストの代理者です。教皇は「すべての信者の牧者として、全教会の共通善と個々の教会の善について配慮するために派遣された者」(『教会における司教の司牧任務に関する教令』2)です。と言うわけで、キリスト者は最初の頃から、ubi Petrus, ubi Ecclesia, ubi salus, つまり、「ペトロの居るところ、そこに教会があり、そこに救いがある」と断言してきました。

ドン・アルバロは好んで次の点を思い出していました。「教皇様との行いを伴った心優しい一致こそ、教会生活と使徒職に欠かせない条件である。主はこの点をはっきりと指摘なさった。『ぶどうの枝が木に付いていなければ、枝だけで実を結ぶことはできない。それと同じように、あなたたちも私の内に留まっていなければ、身を結ぶことはできない』(ヨハネ15,4)。そして、キリストの内に留まるためには、地上におけるキリストの代理者・ローマ教皇と完全な一致を保たなければならない」。

神のしもべは大勢のキリスト者が子として教皇と一致して生きるのを助きました。どのような仕方で助けたのでしょうか。まず、*Regnare Christum volumus!*「キリストの支配を望む!」と司教の紋章にあるように、キリストの御国を広げるため寛大に自らを捧げることによって、教皇に対する愛の素晴らしい模範を示しました。「私たちは、ペトロの後継者愛するがゆえに、すこぶるローマ的になるべきです。そして、その愛は教皇ご自身とそのご意向のための祈りと犠牲、教皇の教えに対する忠実、その指示に対する心からの従順に表されなければなりません」。ドン・アルバロは絶えずこのように説き教えたのです。

聖ホセマリア・エスクリバー一列福式翌日(1992年5月18日)



# 福者ヨハネ・パウロ二世教皇への愛

ドン・アルバロに際立った美点のひとつは、教皇を子としての深い愛で愛したことであった



ヨハネ・パウロ二世教皇との最初の謁見(1978年)

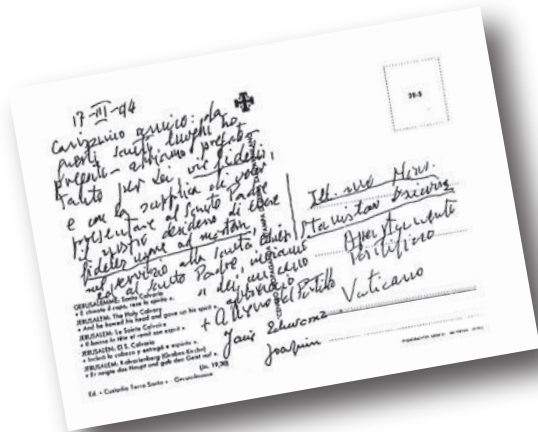
「キリスト、マリア、教皇。この三つの言葉でカトリック信仰全体を要約する三つの愛を示しているのではないだろうか」。この聖ホセマリアの言葉は、オプス・デイを知って以来、ドン・アルバロに大きな影響を与えました。誰がペトロの教座を占めようとも、ローマ教皇への子としての愛と一致が、生涯を通して神に仕えたいというドン・アルバロの熱意を如実に表していました。

教皇に対する子としての誠実な一致は色々な形に具体化されていました。毎日いくども、特にごミサの中で、教皇ご自身のために祈る、オプス・デイの信者と他の大勢の人たちとの会話や手紙の中で、頻繁にキリストの代理者のために祈り、そして犠牲を捧げるよう勧め、教皇の教えを、広めたいという誠実な望みをもって受け入れることなどです。

好んで繰り返した「キリスト者に共通の父親」という表現に込められた敬愛の心は、その他にもさりげない行為に表れていましたが、それは子としての深い愛

情から湧き出たものでした。そのことを示す一例は、死去する6日前の1994年3月17日に、エルサレムから福者ヨハネ・パウロ二世の秘書であるスタニスラオ師宛に送った絵葉書(次ページ上参照)です。その中で、ドン・アルバロは「聖なる教会と教皇に、死に至るまで(usque ad mortem)忠実でありたいと望んでいる」ことを伝えて欲しいと頼んでいます。

第二バチカン公会議中、ドン・アルバロはデスクル司教によってヴォイティワ司教(後の福者ヨハネ・パウロ二世)に紹介されました。デスクル司教はドン・アルバロとヴォイティワ司教双方の友人だったからです。その後二人が再会したのは、1977年11月5日、クラクフの大司教となったヴォイティワ司教がオプス・デイ本部を訪問したときです。その際、大司教は聖ホセマリアの墓の前で祈られました。ドン・アルバロは大司教の人的霊的資質に深く感動しました。教皇に選出される直前の1978年8月16日、ヴォイティワ枢機卿はドン・アルバロの



親愛なる神父様。この聖なる地から皆様方がvir fidelis (忠実な人)になるよう、私、いえ私たちは沢山の祈りを捧げました。教会と教皇様への奉仕において、usque ad mortem(死に至るまで)忠実でありたいという私たちの望みを教皇様にお伝えしたいと思います。心からの抱擁を届けます。(ドン・アルバロが聖地より1994年3月17日に教皇秘書スタンラオ師に送った絵葉書)

招きに応じて、再びオプス・デイ本部を訪問しています。

1978年10月17日、ヨハネ・パウロ二世教皇として選出された翌日、ドン・アルバロは、脳溢血のためジェメリ総合病院に入院していたデスクル司教を見舞いました。病室を出たとき、教皇がまもなく到着するので、帰られるまではその場から動かないようにとの指示がありました。病室を後になさった福者ヨハネ・パウロ二世はドン・アルバロに気づかれると近づいて抱擁してくださいました。ドン・アルバロは教皇のこの愛情を大喜びで受けました。

10月19日には、教皇の愛情に感謝するために、教皇自身が度々訪問されるラ・モントレラに巡礼をし、教皇のためにロザリオの祈りを捧げました。そこから、教皇宛に絵葉書を書き送り、その翌日には手紙を出しています。その中で、オプス・デイに属する信者は、パドレ(父親という意味)であるドン・アルバロの意向のために何千ものミサを日々捧げているが、その祈りをキリストの代理者であ

る教皇に捧げます、と伝えたのでした。この手紙に応えるために、教皇はドン・アルバロを私的な謁見に招かれました。それは非常に暖かい謁見となり、後に実現する無数の謁見の最初のものとなったのです。

聖ホセマリアの後継者としてドン・アルバロが実現すべき仕事のひとつは、創立者が望み、また準備していたオプス・デイの最終的な法形態が付与されることでした。

1982年11月28日、福者ヨハネ・パウロ二世教皇は、使徒憲章 Ut sitによって、オプス・デイを属人区として設置され、ドン・アルバロを属人区長に任命されました。1991年1月6日、教皇はドン・アルバロを司教に叙階されます。このことはドン・アルバロ個人に対する承認、或いは認知の行為であるだけでなく、教会におけるオプス・デイ属人区長に適応する叙階であり、オプス・デイに固有な使命にとって非常に適切な司教職授与だったのです。





教皇謁見の際のドン・アルバロと現在の  
属人区長エチェバリーア師(左)(1983年)

1992年5月17日の聖ホセマリア列福は、ドン・アルバロの生涯において特筆すべき出来事でした。福者ヨハネ・パウロ二世による列福の宣言の言葉に、深い感謝の心で耳を傾けました。翌日、教皇のご厚意で、聖ペトロ広場において無数の巡礼者と共に感謝ミサを捧げることができました。ミサの後、目に見えて感動していたドン・アルバロは、その日に72歳の誕生日を迎えた教皇にお祝いの言葉を述べられました。新しい福者の誕生日と、オプス・デイに対する好意とに、感謝の心を表すことができたのでした。

さらに、教皇に感謝する理由になったことのひとつは、毎年、聖週間中に開催される「大学生大会」(UNIV)の参加者を、教皇が父としての心遣いをもって受け入れてくださったことです。聖ダマソ広場やパウロ六世ホールで開かれた家族

的な雰囲気をもつ集いに教皇自身が臨席され、安らぎのひと時を過ごされました。五大陸から集まった学生たちは、熱心にキリストの代理者である教皇の言葉に耳を傾けたのです。

ドン・アルバロは福者ヨハネ・パウロ二世の司牧上の勧めを、常に迅速に受け入れて実行に移しました。例えば、1985年、新たな福音化を推進するための教皇の決定に忠実に従うよう属人区の信者を励まし、教皇の勧めに応じてスカンジナビアと中央アジアの国々でのオプス・デイの使徒職を推進しました。また、教皇がローマの学生たちのために毎年司式されるミサに大勢の人々を招くよう勧め、ミサの際には属人区の多くの司祭がゆるしの秘跡を聴くように配慮しました。さらに、世界中を旅行される教皇を暖かく迎えるようにそれぞれの国の人

たちを励ましたり、平和とエキュメニズムに関する教皇の意向を人々に広めるように推し進めたりされたのです。

ドン・アルバロは、聖ホセマリアの望みを実現するために、聖十字架ローマ学院(現在の教皇庁立聖十字架大学)の開設に尽力し、ヨハネ・パウロ二世研究所(Istituto Giovanni Paolo II)を軌道に乗せるためにカファッラ枢機卿を支え、教皇の望みに従って、パウロ六世の回勅『人間の生命 (Humanae vitae)』の教えを擁護されました。

福者ヨハネ・パウロ二世と人間的に似たところがあったとは言え、ドン・アルバロと教皇との一致は深い信仰から、つまり教皇はキリストの代理者であるという、ゆるぎない信仰から生まれたものでした。教皇との謁見の前にはいつも多くの祈りで準備をし、教皇から賞賛を受けたときや謁見においては、感極まったという様子でした。教皇から祝福を受けることを常に望み、自身の使徒的旅行の前には必ず祝福を願い、その祝福を旅行中に出会う人々に伝えていました。

1994年3月23日早朝、ドン・アルバロは靈魂を主に委ねました。聖地巡礼からローマに戻った少し後のことでした。午前6時半、当時オプス・デイの総代理であったエチェバリーア師は教皇秘書のスタニスラオ師に電話をかけ、ドン・アルバロが帰天したという知らせを教皇に伝えてくれるようお願いしました。教皇はそのとき、ミサの準備をしていましたが、そのミサをオプス・デイ属人区長のために捧げまじょうと、答えてくださったのです。

その日の午後、教皇は遺体の安置された聖堂を訪れ、遺体を前に深く潜心して祈られました。「死者のための祈り」を依頼され

ると、「サルベ・レジナにしましょう」と言われてそれを唱えられ、その後、栄唱を三度唱えられました。最後に「主よ、永遠の安息を彼に与えたまえ」、「安らかに憩わんことを」と唱えて、ドン・アルバロの遺体に聖水をかけた後、再びひざまずいて祈られました。帰られる際には、そこにいた人々に祝福を与えてくださいました。

エチェバリーア師がオプス・デイを代表して、教皇の愛情深いこの弔問に礼を述べると、福者ヨハネ・パウロ二世は、イタリア語で、「Si doveva, si doveva…(来るべきだったのです、来るべきだったのです)」と答えられたのでした。



ローマのエリス学院(職業専門学校)訪問(1984年)

# ドン・アルバロの取次ぎによる恵みの報告



ドン・アルバロと家族(1987年2月15日長崎市)

び判定をしてみたところ、「妊娠」と出たのです! 自分の目が信じられませんでした。

まず考えたのは、判定が間違っているかもしれないということです。数日後に医者を訪れて検査を受けました。そこで目にしたのは、私たちの祈りは、二倍の恵みとなって叶えられたということでした。二つの心臓が動いていたのです。双子を身ごもったのでした。

C.M.R.さん(スペイン)

## 二つの心臓

私たち夫婦は、私が23歳、夫が25歳のときに結婚しました。子どもたちに囲まれた家庭をつくるのが私たちの夢でした。神様が望まれるだけの子どもたちを受け入れようと話し合っていました。

けれども結婚後一年がたっても、子どもに恵まれませんでした。また一年、一年…と過ぎていき、六年が経ちましたが、妊娠することはありませんでした。医学的な問題があるのかと思って診断を受けましたが、何も問題は見つかりませんでした。それ以上何をしたらいいのか、誰に頼めばいいのか、分からなくなっていました。たくさん聖母の巡礼地を訪ね、いつも同じ祈りを繰り返しました。「マリア様、一人でもいいですから、子どもをお与えください!」

そのうちに、段々と祈ることに疲れてしまい、信仰が薄れてきました。そこで、毎日ゴミサに与って、祈り続ける信仰を神様に願いました。その祈りが聴き入れられたのでしょうか、ドン・アルバロの祈りのカードを使って、ノベナー九日間の祈りをしようと思いつきました。神様は私たち夫婦が一致していることをお望みだと知っていましたから、夫にも一緒に祈るように頼みました。二人で固い信仰をもって、ドン・アルバロにノベナーの祈りを捧げました。九日間が終わった日、妊娠判定をしてみました。結果は「否」でした。けれども、その二日後—その日がドン・アルバロが帰天された3月23日だと後で知りました—再

## 吹雪の中

私の両親は毎日、私たち兄弟とその家族のために祈ってくれています。両親は7人の子どもの親であり、32人の孫の祖父母であり、7人の曾孫の曾祖父母なのです。ある日、知り合いからドン・アルバロの祈りのカードをもらいました。それを祈り始めた最初の日に、奇跡は起こりました。私の家族の経済的問題の解決のために祈ってくれたのですが、別の恵みをいただきました。

当時私の長男は4歳でしたが、高熱を出していました。車で20分ほど離れたところにあるかかりつけの病院まで連れて行こうと決めました。外はひどい吹雪でした。高速道路を降りて、到着までまだ半分の道のりが残っているところで、後ろの座席にいた息子が引きつけの発作を起こしたのです。大声で叫び、体は引きつけを始めました。高熱による引きつけの症状などそれまで聞いたことも見たこともなかった私はすっかり動転してしまい、ハンドルを握ったまま後ろの席の息子の方に手を伸ばして何とかしようと試み始めたのです。前後に車が走っていて、対向車もある中です。しばらくするうちに、息子は意識をなくしてしまいました。

私は携帯電話を取り出して、救急車を呼ぼうとしましたが、バッテリー残量はほとんどゼロでした。救急センターとのやり取りは20分ほどかかりましたが、電話が途中で切れることはありませんでした。確かに緊急用の番号だったので、予備電源を使ったのかもしれませんが、あんなに長く話せるとは



思っていませんでした。

その時の記憶は少し混乱しているのですが、そういう状態の中で、前後の車や対向車に接触することも、スピンしてしまうこともなく、無事に救急車と落ち合える場所までたどり着くことができました。

診断の結果、息子はそれほどひどい病状ではありませんでした。けれども、そのような診察を受ける前に、事故を起こすことなく行動できたのは、ドン・アルバロのおかげだと信じています。息子は治療を受けて落ち着き、その日のうちに一緒に家に帰ることができました。

P.T.G.氏(アメリカ合衆国)

自分から望んでするようになりました

これまでずっと妻と共に、8人の子どもたちに信仰と神への愛を伝えようと努めてきました。

6番目の息子が16歳になった頃、反抗期に入りました。もちろん、すべてに対して反抗する時期を通して、子どもは成長し成熟するのだと理解していましたが、日曜日のごミサに行かないだけでなく、ゆるしの秘跡にも与らなくなったことに心配が募りました。そこで、息子が神と再会するように、ドン・アルバロに祈り始めたのです。

数カ月間祈った後、息子はゆるしの秘跡に与って、ご聖体を拝領しました。現在は、日曜日のごミサに行くだけでなく、週末に友だちが泊りに来るときには、必ずその友だちも連れて行くようになりました!

G.G.氏(アルゼンチン)

## 『道』に“登場”しているドン・アルバロ

今年2月に全面改訳版が出版された、オプス・デイ創立者聖ホセマリア・エスクリバーのベストセラー『道』。その中に、ドン・アルバロが“登場”しているのをご存じですか?



覚えているだろうか。あなたと私は夕もやに包まれて祈っていた。近くには水のざわめきが聞こえていた。するとカスティールヤ(スペイン中部カスティールヤ地方のこと)の町の静けさをぬって、まだキリストを知らないと苦しげに叫ぶ諸国民の、様々な言葉の声も聞こえてきた。

あなたはためらわずにキリストの十字架像に接吻し、使徒を漁する使徒となる恵みをイエスに願ったのだった。

(『道』811)

ここに登場する「あなた」とは、ドン・アルバロのこと。1938年秋、スペイン内乱中、避難先のブルゴスの町での出来事だそうです。

聖ホセマリアとドン・アルバロの使徒的熱意が生き生きと感じられるこの文章は、『道』の「使徒的熱意」の項に収められています。



植樹するドン・アルバロ(1987年2月18日長崎市)



## モンコーレ病院（コンゴ民主共和国）の成長

ドン・アルバロが後押ししたキンシャサの医療機関の順調な成長

### 病院のはじまり

20世紀終盤の約30年間、キンシャサにあるモントウンガフラ丘陵地帯は都市開発が盛んに行われ、インフラ整備は行き届かないものの、労働意欲の旺盛な若い家族が大勢住んでいました。この地域の衛生状態が劣悪であることは明らかだったので、若い医者たちのグループがモンコーレ病院を建設するという冒険に乗り出しました。

モンコーレとはリンガラ語で、アフリカの赤道地帯の森林でもっとも美しいと言われている樹の名前です。この樹の葉は一年を通して深いエメラルド色から赤色へ、さらに黄色へと変化していきます。ド

ン・アルバロは1989年、コンゴを訪問した際、キンシャサに滞在しました。当時建設中だった現地には残念ながら行くことができませんでしたが、病院建設に乗り出した人たちを励まし、将来繰り広げられることになっていた事業のために祈ることを約束し、祈りによってモンコーレの推進と発展を支え続けました。

### 活動の発展

1991年4月から、診療活動が始まりました。現在モンコーレ病院は、この国にとって極めて重要な三分野、すなわち産婦人科、小児科、感染病科における専門病院です。保険衛生、幼児救急医療、生

命倫理、継続的な医師養成などの分野で、コンゴの医療機関の中心的役割を果たしています。また、経済的手段に欠ける患者の割合が非常に高い病院でもあります。1997年6月から、25床のベッドを備えた外科治療も始まりました。2005年「エイズ撲滅」プロジェクト、2006年「新生児期鎌状赤血球症追跡研究」、2009年「基本的健康支援」をそれぞれ開始しました。2009年5月1日には、「外科診療センター」が開設されています。

キンシャサの人口はおよそ500万人で、周辺地域における衛生状態はいまだに劣悪なものです。モンコーレはこれらの地域に三カ所の診療所を開き、外来患者の治療、識字コースなど、形成・養成の活動を続けています。このように、モンコーレの活動範囲は、モントウンガフラの住民14万人以外に、50万人にも及んでいます。

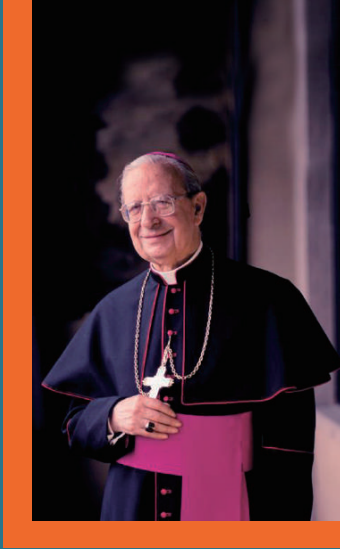
## 病院の枠を超えて

モンコーレ病院に付属するISSI(高等看護学学院)と呼ばれる看護学校が、1998年1月、国の認可を得てスタートしました。就学期間は3年で、この看護学校からヨーロッパと同レベルの教育を受けた看護師たちが巣立っています。また、1995年、モンコーレの医師たちによって、若い医師たちに大学院レベルの教育課程を与える活動も始まり、後にCEFA(医療支援養成センター)として大学院教育を提供し、2000年、独立した本部と法人格を獲得しました。また、2007年、150床を備えた母子医療センターが建設されました。

\* \* \*

コンゴの多くの人々と、多数の非営利団体の援助のお陰で、モンコーレという樹はコンゴ社会への貢献度をますます増していくことでしょう。





### 私的信心の祈り

慈しみ深い父なる神よ、御身は主の司教・しもベアルバロに、模範的な牧者として教会に仕え、オプス・デイ創立者・聖ホセマリアの真に忠実な子・後継者となる恩寵をお与えになりました。どうか私もまた、キリスト信者としての召し出しの務めに忠実に応え、日常生活のあらゆる時と状況を主を愛する機会とし、キリストの御国に仕えることができますように。御身のしもベアルバロに栄光を与え、その取次ぎによって私の願い（ここでお願いする）をお聴き入れください。アーメン。

### 主の祈り アヴェ・マリアの祈り 栄唱

教皇ウルバノ八世の教令に従い、教会当局の判断を予測したいかなる事前行為をも行う意図のないこと、またここに記載された祈りは公的崇敬のためでないことを宣言します。

神のしもベアルバロ・デル・ポルティエーリョや、聖ホセマリア・エスクリバー、オプス・デイ属人区について知りたい方は、次のサイトをご覧ください。

[www.opusdei.org](http://www.opusdei.org) (日本語版有)  
[www.josemariaescriva.org](http://www.josemariaescriva.org)  
[www.escrivaworks.org](http://www.escrivaworks.org)

アルバロ・デル・ポルティエーリョの取次ぎによって恵みを得た方は、オプス・デイ属人区までご連絡ください。

〒659-0095 芦屋市東芦屋町12-12 ハウス104  
Eメール: [info@opusdei.jp](mailto:info@opusdei.jp)

このニュースレターは無料で配布されていますが、経費は寄付によって賄われています。

ご協力いただける方は、下記の銀行口座までご寄付をお願いいたします。

宗教法人  
オプス・デイ・ジャパン  
東京三菱UFJ銀行  
芦屋支店  
普通預金 3867278

発行  
オプス・デイ属人区広報室  
オプス・デイ属人区長  
ハビエル・エチェバリア  
司教認可済